

午和四年十月一日發行
漢幣一七八年二月一日發行

京鹿子



鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十五



芋殻火の終のひと火へ母の息
おつとりの妻へ託する茄子の馬
ひと色の夢は零さず白芙蓉
今朝の秋身ぬちの水の透きとほる
素矢を食う無月の夜の返し文
機を見るに貧乏なるや穴まどひ

由良の門にいざよふ月と孤舟かな
雲追ひかけるそして・・今は秋
秋澄めば鉾杉の空たひらかに

吟行・嵯峨野

老杉の天衝く愛宕秋気澄む
初秋の嵯峨野にひろふ悲恋二話
風わたる石仏の群れ秋のこゑ
風の背を追へば竹林秋そこに
秋蝶の首塚二基へたもとほる

近詠

和田 照海



早星

病室に火蛾許されず
 麻酔醒む
 縫合の真直にあらず
 水中花
 火急なる気配のナース
 早星
 虹立つや風呂敷ひとつ
 転棟す
 青葉木菟消燈以後の
 ナースの灯

近詠

松本 鷹根



秋出水

露草の留める紺に来る朝日
 木の実落ち怒のごとく跳ねるあり
 翅あるに高さ目差さず老ゆる蠅
 諸掘つて土と小言が直ぐ乾く
 秋出水鷺の濁声に佇めり

塩貝 朱千



篠懸の小径

老鶯の詰問攻めにしどろもどろ
篠懸の小径まで来て杖伸す
白詰草に遠き想ひ出遠き人
四つ葉探す娘らに混りて夏鴉
白雨来て槐の傘へ隠れこむ

英華採集

夏落葉皇女の悲話にもらひ泣き
皇女和宮は、公武合体という政争の具として泣く泣く徳川家茂の元へ総勢一万人以上の大行列を従え悲劇のヒロイン役を演じ江戸へ下向した。しかしその後は、家茂との仲は互いに惹かれ合うものがあつたようだ。長州征伐の折り大坂城で無念の死を遂げた家茂が残した最後の贈り物の西陣織の反物を見て和宮が詠んだ「唐織ごろもなにかせむ綾も錦も君ありてこそ」の歌に家茂への思いを示す証しがある。そして、何より京よりも東京暮らしを望んだ和宮の心の変化の機微を季語がしっかりと受け止めている。

肩書でふ身の鎧解け昼寝せり
肩書に真つ先に過るのがサラリーマン。禄を食み会社に忠誠を誓い立派な肩書を拜命し身を粉にして働く企業戦士も今では、「働き方改革」などと言われサラリーマンには馴染まない。片や女性はどうか？「家」に「嫁」と書いて嫁ぐの言葉通り欲しくもない肩書を頂いた女性は、「家」に対して働き詰めの人生を送ることになる。正しく身に鎧を付けられ縛られた感覚に違いない。昼寝という一時の逃げ場に安らぎを求め小さな幸。季語に俳味を持たせた妙がある。

女なり草矢うちつつ五黄の寅

横浜 兵 泉美

五黄の寅とは、五黄土星の年に生まれた寅年の人のことで年廻りは三十六年毎となり二〇二二年がこの年。五黄の寅の女性は、行動力がありバイタリティーにあふれ気品も合わせ持つと言われる一方で気が強く敬遠されるようである。掲句は、上五でいきなり女性を意識させるべく強調し、私が草矢を打てば必ず狙った獲物を自分の物にする、という気概を感じさせる。いやはや五黄の寅の女性恐るべし。因みに私も五黄の寅ではあるが、人には五黄の猫と言っている。

秋の風 沼田巴字

大刈田大海原をまなかひに
しんみりと聞く弔辞かな秋の風
骨壺を持ちて帰る野秋の風
老いの身に燃ゆるものあり実千両
人賞めて生きるすべあり冬隣

十三夜 植村蘇星

月天心切れ字省略今を生く
月天心明日があるさ矛納め
撫で石やほんのりめかす十三夜
月天心住めば都よ心満つ
月天心シュレッターの音過去は過去

涼夜 北川孝子

汗拭いて考へる歩のまた一步
誰かれの優しさに生く真炎天
汗の顔笑へぬ顔のふたつ三つ
白玉のあわふつふつと生きて居り
階下より歌声ひびく涼夜かな

遠日傘 直江裕子

城あとの一日花なり遠日傘
水昏れていつもの椅子に沙羅の花
梅雨空を動かしてゐる鳶一羽
ポスターの公約白し立葵
紫陽花のかげからぬつとコロナ顔

焼茄子 高木晶子

追分の風待ちかねて蝶の羽化
白靴に朝は大盛宿場飯
青花育て住みつくことも宿場町
鮎解禁水の流れの果の緑
世に古れば苦さも好む焼茄子

仕立下しの単衣 伊藤希眸

瀧のやうな梅雨行き交ふ人の声消ゆる
庭草の伸びて泳げり鯉となり
江戸っこや鉋削りのやうな付き合ひ
仕立下しの単衣に夕べの風通す
日盛りの道塞がるる救急車

こっち向いて 奥田筆子

晴天の霹靂われら木偶と化す
太平楽真夏の隙を撃たれけり
深みどり大化の改新劇再演
扇風機こっち向いてのボタン押す
奈良発の暗殺数へ真夏の夜

芒まで 井上菜摘子

投函のこの手はなさば芒まで
ピンポン玉西へころがる秋の家
ハッシュタグ # 君まだ 翺雲の下
行程をゆるゆるとある竹の春
飛行機雲ひとすぢ明日は牧閉ざす

神麓集

小石川後樂園 村田あを衣

東京へ香水瓶の封を切る
青葉風繰るは光圀旅日記
水底まで青葉透きたり水戸魂
相合の日傘のめぐる後樂園
京ことば江戸になじみぬ絹扇子

ほうたる 山中志津子

シテもワキもほうたる戦の闇に舞ふ
夏帽はわたしの主張始発駅
葛城も蘇我氏もほろび柿の花
五十三次に足す川風の川床明り
短夜や早や爆撃の近き音

コンビ二前の盆 井尻妙子

立ち詰め母の生涯茄子の馬
たむろする若者コンビ二前の盆
あの頃の家族七人天の川
カンナ燃ゆ叶ふなら晩年は白
銀漢や近隣に訃のまた一つ

築山ぬれて 鷺山珀眉

草笛の君のメロディー里遠し
すいれんのほぐれんとして風を抱く
尺蠖の計りきれない可能性
ひあふぎや築山ぬれて日の昏れて
紙魚ならば喰べ尽したきこの一書

とうすみ 亀井福恵

とうすみの無一物とはかく自在
更衣してもこの世の寧からず
開いては閉づる歳時記半夏生
実梅落つ天の配剤かも知れず
十葉にかがみて腓返りかな

緑雨 菊池和子

川床や一会の風の風しづく
夕影をしまひ忘れし川床の夕
草津の史つむぐ緑雨の詩ごころ
道教へもしやあなたは和宮
つばめ反る手も足も出ぬ宿本陣

百面相 西村白杼

戦争は母の紙魚なりほろほろ鳥
川床料理ここは貴船の銀座とや
姫女苑われもわれもと背を伸ばす
沙羅落下十方諸仏の浄土かな
青葉闇鬼の館の百面相

火の鳥 安田優歌

野仏に血の通ひだす大夕焼
鷺一羽火の鳥となる大夕焼
百才のおうなの綺(あや)や姫螢
遠き日の鎮守の杜や木の実独楽
六十五年の縁の航路大夕焼

紙魚のこ糸 本郷 公子

書き込みの夫の書籍や紙魚のこ糸
手もふれで別れ来し日や月見草
宿帳の「土方」の名やほととぎす
夜もすがら禁裏虚空の青葉木菟
凌霄花開かぬ鉄扉の鏽の黙

処暑の海 石原 孝人

溪谷は風の工房水澄めり
睡蓮や水面にしるす風の影
あぶくほど夢ありし日のソーダ水
木洩れ日も瀬音も馳走貴船川床
金色の落暉の破片処暑の海

か げ 佐藤 千恵

子を叱るひまはりのかげ己が影
茄子焼いて晩年の日々つつがなし
郷愁の郷愁を呼ぶ夏の雲
檜扇のゆらりと女三宮
白南風や視線気になる浜のカフェ



京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

水琴集

紫陽花のほぐれときめきひとつあり

草の弧にとんぼう風を止めけり

一生は一と日を積んで日日草

過去といふ七いろ十いろ青簾

ソ口はバリトンやがて朝蝉合唱団

福岡 上原 玲子

朴の花香りて羅漢笑まふかな

日々献茶回向して朝涼の内

振花ひとは螺旋に老ゆるかな

花三つ紫陽花青き月夜かな

ケータイが胸で震へてゐる夏野

螢籠郷のせせらぎ持ち帰る

河骨やみどり子すでに蒙古斑

恋螢光跡消して草の闇

病葉も寂となりたる毛利邸

窯出しの鶴首そろふ麦の秋

福山 村井 良永

中島三喜子

癒ゆること信じて約す秋の旅

北村 梢

夏蝶にあそばれてゐる猫の昼

梅雨深し絡みしままのミシン糸

ゆふぐれの町にとけ入る夜店の灯

群青の海色に染む大南風

紙魚走る吾が青春の一ページ

大津 鈴木 順子

水音の先づくつろげし貴船川床

川床料理終れば舞台降りしごと

螢飛ぶ草書行書の火を曳きて

かき氷言葉は匙でかき消され

銚立の男蝶女蝶の結び立つ

灯火親し集ふ女の姦しき

京都 吉田 悌子

真つ直ぐな道もジグザグ白日傘

夕端居過ぎゆく昭和巻き戻す

夏予選テントの中の大薬罐

夏落葉皇女の悲話にもらひ泣き

京都 福森 順子

梅雨寒やシャッター街の錆の音

青葉騒阿修羅の眉の険しさに

草津宿団子ありそな夏暖簾

肩書てふ身の鎧解け昼寝せり

犬猿の墓石を繋ぐ蜘蛛の網

赤穂 久保みどり

家父長制知らぬ孤高の蝸牛

まだ序曲体温越えし梅雨一日

狂ほしき梅雨最短や虚数I

女なり草矢うちつつ五黄の寅

群生の二人静や小宇宙

時の日や戦争は人火に落とす

横浜 兵 泉美

花氷鏡のわたしはどんと晴れ

旅のおさそひ出目金のひるがへる

最速も遅速もありて蝸牛

アヲチ 伊吹 之博

山頭火気取る子犬や梅雨の入り

もてなしは庭で挽ぐグレープフルーツ

申の刻山懐の鐘暑し

眠る森起こさぬやうに夏タオル